

教師の資質能力に関する調査—小学校予備調査の結果分析—

Investigation Concerning Teacher's Ability

— Analysis of Elementary School Preliminary Survey Result —

佐藤 広志* 進藤 正洋** 田上 由雄** 成田 信子**
Hiroshi SATO Masahiro SHINDO Yoshio TAGAMI Nobuko NARITA

抄 録

本研究の目的は、小学校教師の資質能力を調査し、教員養成および現職教育のプログラムを開発することにある。そのために学校教育に関与する人々ステークホルダー——に質問紙調査を行った。本論文では、その予備調査の結果を分析した。ステークホルダーはいずれも今日の子どもを取り巻く諸問題に敏感に反応して回答している。しかしながら保護者と教師では、子どもへの焦点の当て方が異なっている。教師はある種の能力を大学で身につけ、他の能力を勤務校で身につけると考えられている。この研究は教師のライフステップを見極めた研究へとつながることが望まれる。

はじめに

1. 調査の目的

学校教育をめぐる様々な問題に対して、社会（マスメディア、地域住民、保護者）の学校教育への不満、不信、その解決への期待と要求は、ますます厳しくなっている。これまでに例のない複雑な諸問題の解決のために、教師の役割は一層重要になっており、その資質能力の向上は、行政や学校が早急に取り組みねばならない状況にある。

変化し続ける社会で子どもたちを教育する教師の資質能力は、常に点検、更新していく必要があり、教員免許更新制、現職教員研修がスタートする今日、現代の学校教育にふさわしい教師の資質能力を、養成課程、現職教育においていかに育成していくかが喫緊の課題となっている。

教員養成に関して現在このような問題を抱えながら、これまでの教師教育研究また教育社会学研究では、学校教育に関与する人たち、いわゆるステークホルダーが、実際に学校現場や教師に対してどのような要請をもち、いかなる資質能力を教師に求めているのかということに関する実態の把握は十分ではなかったといえる。そこで、小学校、幼稚園の教師と保護者に対し、今日の社会におい

* 関西国際大学人間科学部 教育総合研究所学内研究員

** 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

て教師に求める資質能力に関する調査を設計し実施する。この調査によって、ステークホルダーの代表である教師自身と保護者が、教師の資質能力をどのように認識しており、またその資質能力について教師に求める資質能力に関する調査を設計し実施する。この調査によって、ステークホルダーのどこで養成すべきだと考えているかに関し予備的なデータを得ることができ、それをもとに今日の初等教育教師に求められる資質能力とその養成に関し、いくつかの仮説を立てることができると考えている。19年度に予備調査を実施し、その結果の分析考察に基づいて調査を再設計し、20年度に本調査を実施する。

2. 予備調査の概要

(1) 予備調査の設計

今回の予備調査にあたっては、過去に実施された同種のアンケート調査等の質問項目も参考にしつつ、文教行政が規定する教師像を一定のメルクマールとして設定してみた。例えば、文部科学省「魅力ある教師を求めて」（文部科学省HP，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm）の冒頭に、「教師に求められる資質・能力」が図示されているが、それによると「いつの時代にも求められる資質能力」と「今後特に求められる資質能力」の2つに大別されており、前者が実践的指導力の基礎になるような図式である。前者はまた、時代を超えた普遍性を有する資質能力と理解され、後者は時代の変化が要求する新たな資質能力として規定されている。今回の調査票設計にあたっては、これらの図式を参考にしながら、我々として独自の視点を盛り込んで質問項目を列挙した。

時代を超えた普遍性を有する資質能力の具体的項目として列挙されているのは、「教育者としての使命感」「人間の成長発達についての深い理解」「幼児・児童生徒に対する教育的愛情」「教科等に関する専門的知識」「広く豊かな教養」などである。これらは大学の教職課程において「教育原理」「教師論」「教育心理学」「発達心理学」などの教職専門教養として課題設定されるテーマと、各教科領域に関する専門科目や一般教養科目の履修によって修得が目指されるものを含んでいる。確かに、これまでの教師養成の伝統的なスタイルにおいては、教職を目指す大学生はこれらを順次学び、そこで学んだものをベースに、教育実習等で実践的指導力を試す、という手順を踏んで、教職への道を歩んでいる。

一方、時代の変化に伴って、さらに要求されるようになった資質能力については、主に三つに分けられている。(1)地球の視野に立って行動するための資質能力、(2)変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力、(3)教師の職務から必然的に求められる資質能力、の三つである。(1)のキーワードは文字通り「グローバリズム」であり、地球規模の諸問題(環境問題、国際協調、ヒューマニズム)等への感受性や問題意識を求めている。(2)は、学校の教師に限らず、社会人一般に求められている「社会人基礎力」と通じるもので「課題解決能力」「人間関係の構築能力、コミュニケーション能力」「変化への適応と自己啓発・生涯学習への積極性」などを強調している。(3)については、教

育現場の変化と子どもの変化に対応して、より適切な指導方法を構築するための諸技能・諸能力を規定しているようである。ある程度の普遍性を有するものとして、伝統的な教育学を修得した上で、さらに、現在の教育現場で実際に起こっている新たな教育問題に対して、より有効に機能する諸方略を身につけることが求められているといえる。

総じて、文教行政サイドが教職者に対して要求しているのは、教職担当者としての基盤形成と、変化し続ける現状への対応能力だと要約することができる。この認識は、公教育の整備と現状における課題解決を求められる行政サイドの提示としては、極めて合理的で遺漏のない定式化であろう。

ところで我々が関心を寄せているのは、こうした公式見解として必要性が訴えられているものと、現場を担う教師と自分の子どもを学校に預けている保護者双方の意識や考え方が、どの程度重なり合い、どの程度乖離しているか、という点にある。ここまで挙げてきたような教育に関するスローガンは、往々にして耳障りがよく、反論の余地を許さない性質の言説が多い。闇雲にそれを否定してかかると、常識を疑われかねないような、もっともらしい言説であるため、その種の資質能力など教師には不要である、というように積極的にネガティブな意見表明することは稀である。今回のように、アンケートの形式で問えば、回答者自身が「なるほど、もっともだ。本当に必要だ」と思う項目は「ぜひ必要だ」と答えるであろうし、そうでなければ「否定はできない」「もっているに越したことはない」→「まあ、どちらかといえば必要だ」と答えることになるであろうと推測する。

つまり、今回の予備調査において、列举した「資質能力候補」のうち「ぜひ必要」という回答が少なかった項目は、当事者（＝教師および保護者）の一群にとっては、さほど重要性を認めていない項目なのだろうと解釈することができる。文教行政サイドの問題認識としては、当然視野に含めておくべきものとして取り上げられた項目であっても、教育に直接関与する当事者にとっては二の次でよい、と考えられているものはあろう。

（2）調査項目と質問

具体的項目の設定にあたっては、教育に直接関与する当事者に尋ねるという視点から、①豊かな人間性 ②実践的な専門性 ③開かれた社会性の3つの観点を挙げて必要項目を検討した。

①豊かな人間性では、「嘘やいじめ、暴力に対する毅然とした態度」や「幅広い教養」「子どもを引きつける表現力」「子どもが好き」「一人一人の個性を大切にする」「社会規範を守り子どもの模範となる言動」「教師としての人間的魅力」等にまとめた。

②実践的な専門性では、「クラスを集団としてまとめる（学級経営力）」「子どもを引きつける表現力」「教科指導力」「生徒指導力（児童理解、健全育成）」「子どもの評価が公正・的確」「国際社会で通用する語学力」「情報機器活用能力」等、実践的指導力を中心とした事項である。

③開かれた社会性では、「地域や保護者とのコミュニケーション（説明責任と連携）」や「教師としての使命感、情熱、意欲、夢やビジョン」「社会への貢献」「地球的規模の問題への関心」「組織や同僚との協調性」等を挙げた。

質問の概要は以下のとおりである。

Q1 小学校教師に必要な資質・能力にはさまざまなものが挙げられますが、以下に並べた各項目について、あなた自身はどのように考えますか。あなた自身の考えに最も近いものに○をつけてください。

- ・ 選択肢：[ぜひとも必要][どちらかといえば必要][どちらかといえば必要でない][まったく必要でない]
- ・ 項目：34項目

Q2 以下に並べた教師の資質能力について、小学校の教師は、それぞれをおもにどこで身につけるべきだと思いますか。1から10のうち、あなたの考えに当てはまるものに○をつけてください。(複数回答可)

- ・ 選択肢：[家庭で、身につけるべきである] (以下「身につけるべきである」を省略) [高校卒業までに、学校で][短大・専門学校で][大学の学部で][大学院まで進学し][教師になってから][クラブ活動等の課外活動の経験を通して][アルバイト等の就労体験を通して][ボランティア等の社会貢献活動を通して][必ずしも身につけなくてもよい]

Q3 Q1やQ2にあげたもので、小学校教師の資質や能力として、あなたが特に重要だと思うものを1位から5位まで挙げてください。

Q4 自分が資質能力向上のために学びたい場

Q5 自由記述

Q6～10 フェイス項目

3. 予備調査の実施

(1) 調査対象について

兵庫県下の小学校において、以下のような対象に予備調査を行った。

単位：人

	小学校 (神戸市内1校 三木市内1校*)
教師	55
保護者	100
	*保護者は三木市内のみ 3年と5年の保護者

(2) 調査方法と実施時期

教師については、校長(園長)を通して調査票を配布し回収した。保護者については、学級で配布し、子どもが持ち帰って保護者が自宅で記入し、封印して学校で回収した。教師に関する調査を学校で回収することで回答に影響が出ないように配慮し、回収方法を工夫した。

調査は2007年12月に実施した。

第1節 予備調査結果の全体傾向

1. 小学校教師が必要と考える教師の資質能力

子どもの成長にとっては教師の教育力が大きく影響する。それは教師一人一人の資質によって大きく左右されることは言うまでもない。学力の低下やいじめ、不登校の増加等々教育現場に山積する課題も多く、社会全体から、教育改革を含め教師の資質向上を求める声は一層強まっており、教師もそれを認識しているのがうかがえる。

今回の予備調査の回答集計（図1）では、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（48/55）」が最上位を示し、2位は「クラスを集団としてまとめていける（47/55）」とほとんどの教師が是非必要と答えている。これは、いじめ問題や学級が機能しない、いわゆる学級崩壊等に対し自分の問題として捉え、危機感を持っていることの表れかもしれない。続いて「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（43/55）」「自らの資質や能力を常に高めようとする（42/55）」「子どもを引きつける表現力（40/55）」「保護者とのコミュニケーションがとれる（40/55）」「子どものしつけができる（40/55）」「子どもが好きである（39/55）」という順序で上位を占めている。

全体的な傾向をとらえると、実践的な専門性である学級経営力や教科指導力、生徒指導力に関わる質問である「クラスを集団としてまとめていける（47/55）」「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（43/55）」「子どもを引きつける表現力（40/55）」「子どものしつけができる（40/55）」「授業技術が身につけている（38/55）」「子どもの評価が公正・的確（38/17）」という項目が上位を占め、教師の高い意識がみられる。教師の指導力を問われる事件や事故が多発し、学力低下や学級崩壊等が報道され社会の批判にさらされることが多くなった現在、小学校教師に求められるものとして教師の実践的な指導力向上の必要性が高まっている。この調査結果で、教師もそれを認識していることが分かる。

また、教師としての豊かな人間性、いわゆる教師としての感性が求められる「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（48/55）」「子どもが好きである（39/55）」「子ども一人一人の個性を大切に（38/55）」という項目に対しても、現在の教育に対する変化や保護者の意識を反映し、教師としての指導技術だけでなく、豊かな人間性を持つことにも高い意識を持っているといえよう。

教師として持っていなければならない使命感や情熱、意欲、規範意識、コミュニケーション能力などに関わる質問である「自らの資質や能力を常に高めようとする（42/55）」「保護者とのコミュニケーションがとれる（40/55）」「教師としての使命感、情熱、意欲（37/55）」「社会的な規範を守る（36/55）」等は、教育公務員としての自覚や開かれた社会性、説明責任が一段と要求されている今日、意識が高まるのは当然といえるのかもしれない。

小学校教師の実践的な専門性という観点の中でも「教科内容についての知識が豊富（28/55）」「得意分野を持っている（27/55）」「子どもの成長・発達に関する専門知識（19/55）」「進学指導上のアドバイスができる（18/55）」「情報機器が活用できる（17/55）」「国際社会で通用する語学力（7/55）」

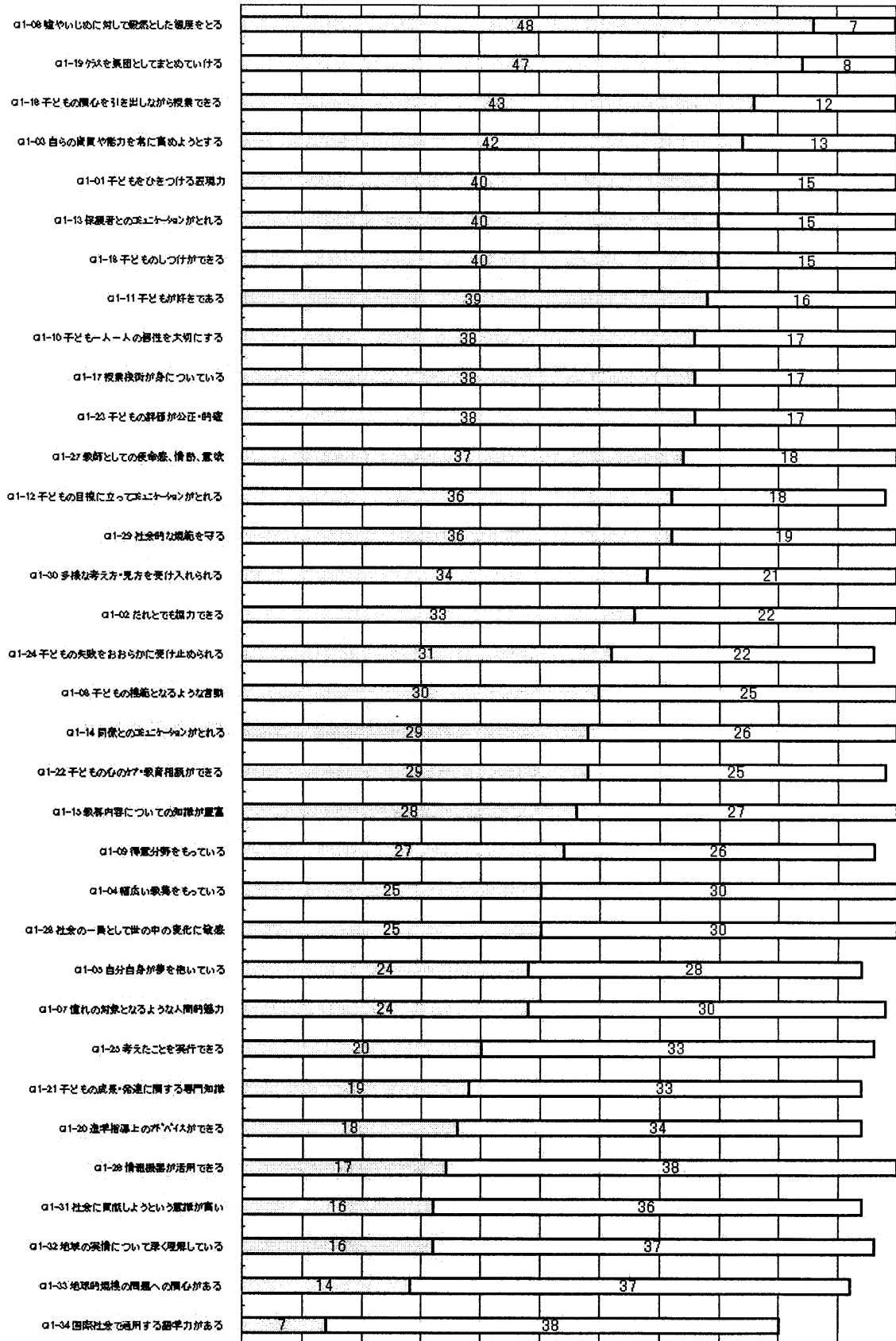
については小学校教育は広く浅くという教育であるため、必要以上の教養や専門知識は必ずしも必要ではないと考えている教師が多いと思われる。しかし、これからは英語活動や地球環境問題、情報教育、特別支援教育等、多様な教育が展開され、専門的知識も必要になると思われるので免許更新制度による研修等に取り入れ、教師の意識を変えていく必要があるかもしれない。

教師の豊かな人間性という視点から見た「憧れの対象となるような人間的魅力 (24/55)」「自分自身が夢を抱いている (24/55)」「社会に貢献しようという意識が高い (16/55)」という項目では是非必要という回答数が低いのは気になるところである。

図1 小学校教師が必要と考える教師の資質能力

N=55。強=ぜひ必要、弱=どちらかといえば必要

5 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55



■強
■弱

2. 保護者が必要と考える小学校教師の資質能力

保護者にとって学校は多様な経験を集団で行う教育活動の場であり、知識・技能だけを身につける場でないことは十分理解していると思われるが、ともすれば自分の子どもの成長だけに目が向いてしまう傾向にある。また社会から得る情報が氾濫し、学力の低下やいじめ、不登校、学級崩壊等の問題に過剰に反応してしまうことも多い。今回の調査でもその傾向が見られ、教師の調査と保護者の調査の中で双方の意識のずれが明らかになるものと思われる。

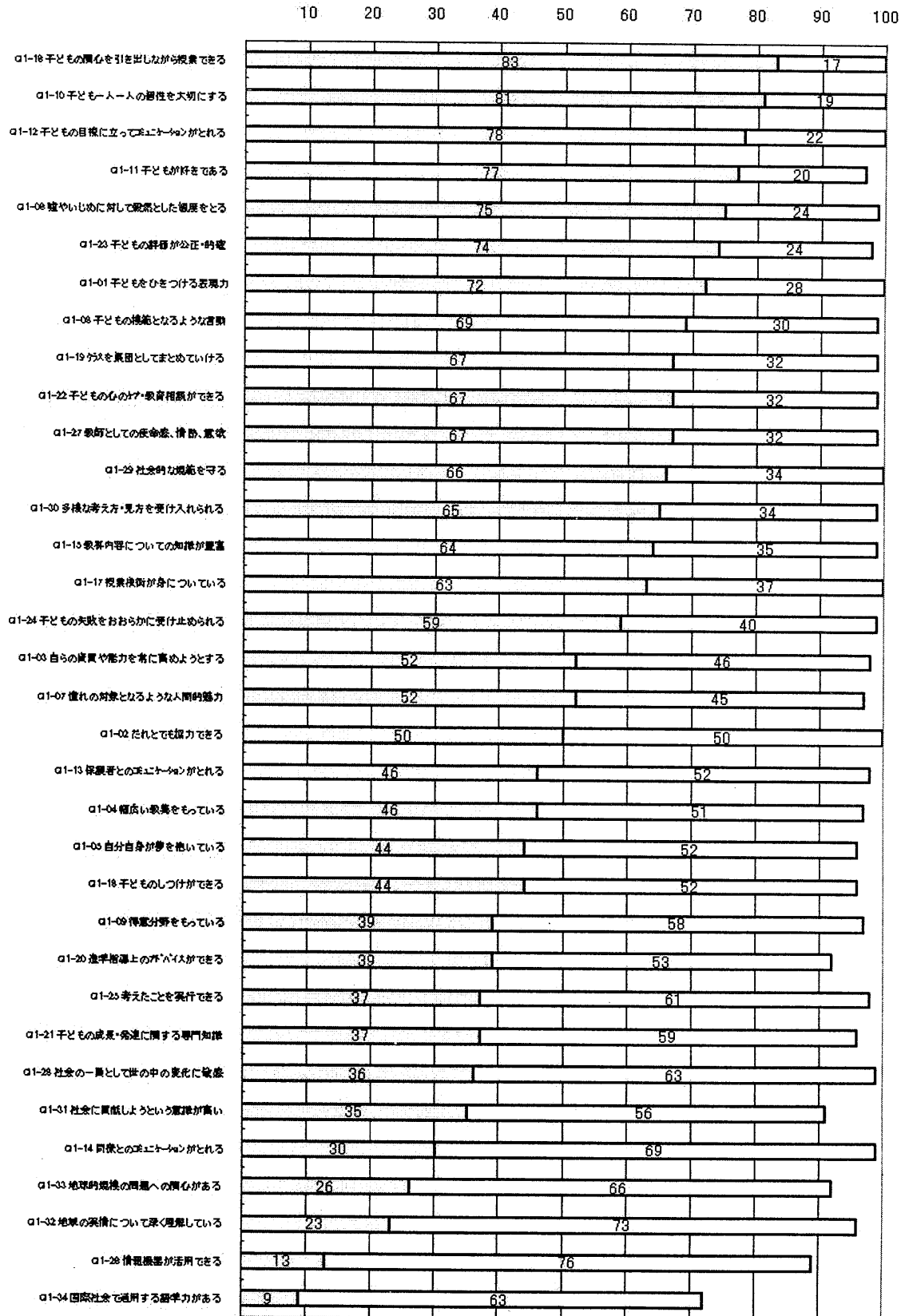
保護者の側からみた予備調査の回答集計（図2）では、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（83/100）」が最上位を示し、「子ども一人一人の個性を大切に（81/100）」「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる（78/100）」「子どもが好きである（77/100）」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（75/100）」「子どもの評価が公正・的確である（74/100）」「子どもを引きつける表現力（72/100）」と続き、上位を占めている。この調査結果から多くの保護者は自分の子どもを通して教師の資質を見ているということになる。

教師の資質能力として小学校教師が必要と考えた、実践的な専門性すなわち学級経営力や教科指導力、生徒指導力に関わる質問について、保護者は「子どもの関心を引き出しながら授業ができる（83/100）」という項目のみに高い意識がみられる。上位10位の中に実践的指導力の項目が4つしか入っておらず、「授業技術が身に付いている（38/55）」という大切な授業力を示す項目は15位にある。このことは、まさに保護者が教師に願っている資質能力は、指導技術よりも普段の生活の中で自分の子どもに向けられるべきものであると考えているということであろう。また、教師が「子どものしつけができる」という項目を7番目に挙げたのに対し、保護者は23番目（44/100）になっている。これについては、教師は家庭でしつけが出来ていないので教師がしつけをしなければならず、教師の指導力の中の上位に挙げたのか、保護者はしつけは家庭でと考えているのか、しつけよりもっと優先して欲しいことがあるのか、教師と保護者の間で意識のずれがあり、さらに詳しい調査が必要であるように思われる。

教師としての豊かな人間性、いわゆる教師としての感性が求められる「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる（75/100）」「子どもが好きである（77/100）」「子ども一人一人の個性を大切に（81/100）」という項目に対しては、現在の教育に対する変化や子どもを取り巻く環境の変化に対応し、教師として指導技術だけでなく、豊かな人間性を持つことを保護者が求めていることが十分うかがえる。特に、いじめについては子どもの生命をも脅かす重大な問題と捉え、危機感を持っていることの表れと思える。この項目については教師側も認識しており、同じような結果となっている。しかし、これについても保護者は自分の子どものことが中心にあり、自分の子どもをしっかり見て欲しい、そのためにはこの項目は教師にとって必須であり、教師に対する強い願いが見えてくるようである。

図2 保護者が必要と考える、小学校教師の資質能力

N=100。強Y=ぜひ必要、弱Y=どちらかといえば必要



□強Y
□弱Y

保護者が必要と考える小学校教師の資質能力調査結果の下位にランクされる「同僚とのコミュニケーションがとれる (30/100)」「地球的規模の問題への関心がある (26/100)」「地域の実情について深く理解している (23/100)」「情報機器が活用できる (13/100)」「国際社会で通用する語学力がある (9/100)」等は、保護者にとって関心が薄いのか、身近な問題でないのかこの調査結果だけでは十分に考察できない。情報機器活用や英語活動は保護者にとっても関心のあることと考えるのに、このような結果になったことについてさらに議論を深め、本調査に臨む必要があると思われる。

いずれにしても、「小学校教師が必要と考える教師の資質能力」と「保護者が考える小学校教師の資質能力」には、様々な家庭背景を持つ子どもを預かり定められたカリキュラムに則って教育する側と、目の前の自分の子どもの現実に関心がある保護者の考え方に違いがあることは当然であると考えられる。今後、本調査を実施するに当たり何に焦点を当てて調査をするかが重要な課題になる。

第2節 重要度が低いと解釈できる項目について

「はじめに」で述べたとおり、今回のアンケート調査において列挙した「教師に必要な資質能力」リストについては、基本的には、現代の教師に期待される要素として網羅的であることを目指した。したがって、そのような項目を頭から否定してかかることのほうが難しく、常識的に判断すれば、少なくとも「あって邪魔にはならないし、欲を言えば修得していて欲しい」ものも含めて、かなり肯定的に票を集めるものと想像していた。実際、今回の予備調査においては、そうであったわけだが、その中で、あえて「必要でない」と回答されている項目があるとすれば、これはかなり強い否定のニュアンスを読み取りうる。少なくとも小学校教師にとっては、それらは無用のものと考えられていることになる。我々が列挙した項目において、そうした項目は実際少ないし、不要だという回答も少数派ではある。しかし、項目によっては、無視できない割合でネガティブな回答を集めているものもある。

もっとも、現職教師や保護者が「二の次でよい」「不要だ」と判断しているなら、それらは教師養成の視点からは除外してかまわないと主張するつもりはない。しかしながら、教職課程における教授内容の優先順位設定が必要な場合に、一定の視点を与える情報にはなると考えられる。

そこで本節では、前節で見たグラフを下層から検討していくことで、今回相対的にネガティブな反応を引き出した項目について考察する。教師側の回答集計から見てみよう。図1において、「ぜひ必要」という回答がもっとも少なかったのは「国際社会で通用する語学力」である。55名中7名が「ぜひ必要」と答えているに過ぎない。それだけでなく、「どちらかといえば必要でない」という回答も55名中10名と最も多く、むしろ否定的な見解が目立つ。小学校では、次期学習指導要領の下で、5年生6年生に外国語の時間が設定されたわけであるが、教師自身が十分な語学力を身につけるべきだとは、あまり考えられていないことがわかる。

次に「ぜひ必要」の回答が少ないのは「地球的規模への問題関心」で、55名中14名が「ぜひ必要」と回答しているにとどまる。その他「社会貢献意識」「地域の実情への理解」なども「ぜひ必要」

とする回答が少ない。このあたりの項目は、先に見た文部科学省の図式でいえば「時代の変化に対応して新たに要求される資質能力」の範疇に入る。「地球的規模への問題関心」はもとより、重要度が最も低いとされた「語学力」も、「国際社会への対応力」という意味では「グローバル化への対応」の一環である。「社会貢献」は、先に示した文部科学省の図式の中には素直に位置づけにくい、2番目の「社会人としての問題関心」に包摂されうる。「地域の実情への理解」は、3番目の「教育の現代的諸問題への対処能力」に関わってくるものと考えられる。

教師自身による回答では、教師として自分自身に求められる資質能力の優先順位を設定する場合に、意識的にか無意識的にか、これらの諸項目は後景に退くことになる。新たな時代にふさわしい資質能力のうちのいくつかは、後回しになっても仕方がない、それ以上に重要な要素があるという認識が全体として析出されていると見ることができる。

今度は、保護者の意識において重要度の低いものを探してみる。(図2)保護者の回答において「ぜひ必要」という回答が最も少ないのは「国際社会で通用する語学力」である。100名中9名が「ぜひ必要」と答えているに過ぎない。また、「必要でない」という否定的な回答も28名がしており、34項目中最も多い。

「語学力」軽視は、教師側の回答と共通する。子ども自身に対しては「語学力」の修得を強く要請していると思えるのに、という素朴な疑問が頭をかすめる。まだ小学校段階では、外国語の修得をそれほど望んでいないのか、少なくとも学校の先生に、英語の指導まで望んではいないのか。確かに、外国語の時間の導入は小学校でも高学年からなので、低学年・中学年に直接関係する教師や保護者にとっては、関心は薄いであろう。

保護者の回答で2番目に「ぜひ必要」が少ないのは「情報機器活用能力」である。13%しか「ぜひ必要」と回答していない。教師側でも55名中17名が「ぜひ必要」と答えているにとどまり、やはり少数回答の部類に属する。PCの使用はどんどん当たり前のことになってきており、ことさら取り立てて求めるほどのことでもないのか、あるいは、小学校の教育活動において、PCの使用はさほど重視されていないのか。ちなみに、これを「不要」と答えた保護者は11名いたが、教師のほうでは「不要」と答えた者はいなかった。

保護者の回答でそのほかに「ぜひ必要」の回答が少ないのは、教師側の回答と共通して、「地域の実情への理解」と「地球的規模の問題への関心」である。いずれも「ぜひ必要」の回答率は30%に満たない。ここまでの傾向は、教師側も保護者側もよく似ており、要するに、教師に求める資質能力の優先度という観点からは、「時代の変化に即した対応」のうちある種のもの優先順位が低いということである。それ以上に、もっと重要なことがある、ということになるのであろう。

保護者側の回答で5番目に優先順位が低いのが「同僚とのコミュニケーション」で30%の回答率である。この点は教師側では55人中29人が「ぜひ必要」と答えており(53%)、傾向がやや食い違っている。教師にとっては、同僚とのコミュニケーション力は、業務遂行上、軽んじることができない要素であるが、保護者にとっては、個々の先生がしっかりしてくれていればよいという想定なのであろうか。ちなみに「コミュニケーション」というキーワードで訊ねている項目は他に「保護

者とのコミュニケーション」と「子どもの目線に立ったコミュニケーション」がある。前者は、教師の73%(40/55人)、保護者の46%が「ぜひ必要」と答えている。後者は、教師の65% (=35/55人)、保護者の78%が「ぜひ必要」と答えている。つまり教師が重視すべきコミュニケーション相手の優先順位として、教師側は、保護者>子ども>同僚、なのに対して、保護者のほうは、子ども>保護者>同僚、というパターンになる。サンプル数の少なさからしても、拙速な解釈は慎むべきだが、このねじれは些か興味深い。保護者のほうは、まずウチの子の話聞いてくれ、という要求が強いのにに対して、教師のほうは、まず保護者との対話が必要だ、と考えているようにも見える。

本節を簡単にまとめておく。文教行政サイドが網羅的に設定した教師の資質能力のうち、「時代の変化に即応した新しい資質能力」のある部分については、現場の教師も保護者も共通して、それほど敏感に反応してはいない。具体的にいえば「語学力」「情報機器活用能力」「グローバリズムへの関心」「社会貢献」「地域の実情認識」などの優先順位が低い。社会の変化に伴って新たに生じてきたニーズについて、必要性をまるで認めないわけではないが、なお教師にとって本質的な課題だというコンセンサスは、弱いと解釈できる。

付随して見えてきた問題として、コミュニケーションの優先順位、という問題がある。保護者にとっては、教師が子どもとコミュニケーションを取れることが何より重要で、保護者自身と話ができることや、教師同士の意思疎通に対する関心は相対的に弱い。一方、教師にとっては、子どもとのコミュニケーションが重要なのは言うまでもないが、保護者と話ができる能力も同等以上に重視している。同僚との意思疎通も保護者が考える以上には重視している。

第3節 教師、保護者の年齢によるちがいについて

1. 教師の年齢によるちがい

近年、わが国では高齢少子化が急速に進んでいる。このことが、小学校教育においてもさまざまな影響を与えてきているのはいうまでもない。なかでも、児童の減少に伴う教員定数の削減は、新たな任用が少なくなったことによる教師の年齢構成のアンバランスや職場全体の高齢化など、学校運営上にも大きな問題を生じていると考えられる。

それぞれの学校には、規模による教師数のちがいはあっても、情熱や意欲に燃えた若い教師から指導技術や実践力を身に付けた中堅教師、そして、経験豊かで判断力があり、教育活動のリーダーともなるベテラン教師まで、バランスよく配置されていることが望ましいのはいうまでもない。そのような職場であってこそ、教師の年齢特性を教育活動にも十分に生かすことができ、校務分掌や学年編成、担任なども比較的スムーズに決定されて、保護者や地域にも信頼される安定した学校運営につながっていくのではないかと考えられる。それは、組織体としての学校運営においては、それぞれの教師のもつ個人的な資質能力だけでなく、職務遂行上の立場や役割、校務責任の重さなどについて勤続年数や年齢のもつ意味合いも関連していることが推測できるからである。

そのため、教師の資質能力について考えていく際に、それぞれの立場や周囲の期待感などが教師自身の能力意識にも反映され、それが経験や年齢によるちがいになって表れてくるのではないかと、という視点が必要になる。

そこで、予備調査では、一人の人間として、また教育の専門職として、すべての教師に共通して求められる資質能力の調査だけではなく、年齢や経験年数によっても、必要な能力の受け止め方や考え方にちがいがあるのではないかと、という立場から、調査項目には次のように ①29歳以下 ②30-39歳 ③40-49歳 ④50-59歳 ⑤60歳以上 という5段階の回答者の年齢を尋ねる項目を設定している。(年齢の下は今回調査できた人数である。なお、⑤については退職直前の1名のみが該当したが、本調査では④に含めてもいいのではないかと考えられる。)

<調査対象> 神戸市立、三木市立の小学校教師 (各1校) 合計 55名				
①29歳以下	②30-39歳	③40-49歳	④50-59歳	⑤60歳以上
7名	8名	20名	19名	1名

なお、勤続年数は、①1~5年：8名、②6~10年：4名、③11~15年：6名、④16~20年：9名、⑤21~25年：4名、⑥26~30年：9名、⑦31~35年：10名、⑧36~：4名であった。しかし、年齢や年数についての調査は10年単位による年代別を選択する方法としたため、残念ながら教師の平均年齢および平均経験年数については明らかにすることができなかった。

また、今回の調査では対象人数が少なく、教師の年齢と経験年数の相関関係を把握するまでには至らなかったが、このたび新たに導入された教員免許更新制度やすでに行われている年次研修の充実のために、教師の資質能力の受け止め方における質問項目を検討し、年齢と経験年数との関係についても調査分析する必要があると考える。

— 教師の年齢別調査の概要 —

小学校でも教師の高齢化が予想されたものの、このたび調査対象とした2つの小学校(教師数合計55名)でも40歳以上の教師が72.7%(40名)を占めており、その現実を改めて知ることとなった。したがって、今回の予備調査は調査数そのものが限られているというだけではなく、教師の年代は40代、50代が多く、20代、30代が少ないという、回答者の年齢に偏りがあるなかでの調査結果の分析となった。

次に、回答された内容についてみると、どの年代でも「自らの資質や能力を常に高めようとする」、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」、「クラスを集団としてまとめていける」、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」などの能力資質が高い選択率であり、小学校では多くの教師がとくにそれらを重要であると考えていることがわかる。しかし、それらは学校教育の今日的課題などとともに、教師の年齢や経験年数によってもその選択理由にちがいがあることも考えら

れる。今後さらにその内容を検討していくことが必要になると思われる。

予備調査の限られたデータからの考察であり、信頼度には問題が残るものの、教師の年齢別による「教師に必要な資質能力」の受け止めについて、年代別の特徴や傾向がかなり明らかになってきた。その概略は次のようである。

<20代教師>

まず、教師にぜひ必要な資質能力として「子どもをひきつける表現力」、「自らの資質や能力を常に高めようとする」を全員が挙げている。そして、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」、「子ども一人ひとりの個性を大切にする」、「クラスを集団としてまとめていける」、「子どもの評価が公正、的確」もほとんどの教師がぜひ必要と考えている。また、「子どもが好きである」、「子どもの目線に立ってコミュニケーションができる」、「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」なども多い。これは、子どもたちと直接かかわる学級担任として、毎日の教育実践のなかで、さまざまな課題に直面し、自らの能力向上の必要性を常に感じているからではないかと考えられる。

また、「教師の使命感、情熱、意欲」、「だれとでも協力できる」、「幅広い教養をもっている」、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」、「憧れの対象になるような人間的魅力」、「保護者とのコミュニケーションができる」、「同僚とのコミュニケーションがとれる」なども必要な資質能力として挙げた教師が多い。これらには、教師としての自らの姿勢や個別的課題なども関係していることが考えられる。

<30代教師>

「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」、「授業技術が身につけている」が最も多く、次に「保護者とのコミュニケーションがとれる」、「クラスを集団としてまとめていける」が続く。さらに「子ども一人ひとりの個性を大切にする」、「教科内容についての知識が豊富」、「子どものしつけができる」、「子どもの目線に立ってコミュニケーションが取れる」を挙げている教師も多い。そして「自分自身が夢を抱いている」、「憧れの対象になるような人間的魅力」「社会的な規範を守る」なども必要と考えている。このように資質能力の幅が広がることに特徴が見られる。

これは、指導上の多様な課題の自覚でもあり、担当クラスの児童とのかかわりだけでなく、学年全体の活動推進、子どもの個別指導や自らの授業改善、学力向上の研究など、教育実践の広がりや質的な向上をめざすとともに、自らの生き方をも意識しているからではないだろうか。

とくに注目されるのは、教師の資質能力にぜひ必要なものとして「子どもが好きである」、「教師の使命感情熱、意欲」などが、他と比べてこの年代だけ選択率が低くなっている点がある。これは、「子どもが好き」だとか、「教師の使命感」だとかいうことよりも、目の具体的な課題の解決や指導技術の向上などへと問題意識の変化をうかがわせるものである。

また、30代教師は学校で同年代が少ない貴重な存在でもある。採用時の社会的背景が、今、このような形で教師の姿勢や意識に影響しているとすれば、この年代の教員研修のあり方等についてすべし問題のひとつとなる。教師の年代別意識のちがいを把握するときには、現在の意識につな

がる採用時の社会的背景などについても、注意深く分析してみる必要があると思われる。

<40代教師>

ぜひ必要な能力資質として「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」、「クラスを集団としてまとめていける」を90%の教師が挙げている。また「子どもが好きである」、「子ども一人ひとりの個性を大切にする」、「子どもの関心を引き出す授業」、「子どものしつけができる」を80%の教師が取り上げている。子ども、保護者、同僚との「コミュニケーションがとれる」、「多様な考え方、見方を受け入れられる」についても70%以上が、「教師としての使命感、意欲、意欲」や「社会的な規範を守る」、「子どもの評価が公正、的確」なども多くの教師が挙げていることも興味深い。

この年代は、学校の教育活動の推進役的な立場になる機会が増えるとともに、教師がこれまでの教育実践を振り返り、改めて自らの指導観や教育観、そして教師観などを確立しようとする意識の表れとも考えられる。

<50代教師>

「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」は他の年代と同様に多く、95%の教師が取り上げている。また、「授業技術が身につけている」をはじめ、「クラスを集団としてまとめていける」「教師としての使命感、情熱、意欲」を85%の教師がぜひ必要と考え、次に「子どもの評価が公正、的確」、「子どものしつけができる」、「社会的な規範を守る」が続いている。さらに「得意分野を持っている」、「幅広い教養をもっている」、「子どもの模範となるような言動」、「子どもの心のケア、教育相談ができる」「子どもをひきつける表現力」などを挙げた教師も多い。とくに「社会の一員として世の中の変化に敏感」や「情報機器が活用できる」などが他と比較して多いのも特徴的である。

これらから、学校の内外を広く視野に入れた学校観や教師観を意識しつつ、学校運営の責任的立場や教育組織のリーダーとしての自覚とともに、自らの経験をもとにした後輩への願望もあるのではないかと考えられる。また、この年代の教師が「世の中の変化」や「教育機器の活用」を意識していることから、学校教育が科学技術の進歩や社会の変化に対応していくために、教師には常に新しい知識や技術等の研修が必要であることが推察される。

総じて、今回の教師の年代別回答の分析結果については、次のようにまとめられるであろう。

教師自身が考える「教師として必要な資質能力」については、自らが獲得してきた人間性や専門性、指導観などをもとに、とくに必要性を実感したものを取り上げているのではないと思われる。その結果、回答者の立場や必要課題、年齢や経験年数によってはとりあげる資質能力の内容にちがいが生じることになりやすい。

そのため、このような年代別の調査分析においては、「教師のライフステップ」となるモデルを検討し、その全体を明らかにして、生涯学習や生活環境と十分に関連させながら「教師の資質能力」を考えていくことが必要になると思われる。そうすることにより、その成果は、とくに年次別の教師研修を充実させていくことに寄与できるものとなると思われる。

2. 保護者の年齢によるちがい

今回の予備調査は、小学校3年生と5年生の児童の保護者を対象にしたものである。

小学生は、まだまだ保護者が直接的に関われる発達段階にあり、生活環境とともに保護者の考え方が教育に反映されやすいといえる。そのような時期の保護者の学校や教師に対する期待感の表れとして「教師に望まれる資質能力」を把握することは、ステークホルダーを重視した今回の調査目的のための貴重なデータとなるものとなる。

今回の調査で明らかになった保護者の考える教員の資質能力は、「子どもの関心を引き出しながら授業ができる」をはじめ、「子ども一人ひとりの個性を大切にする」、「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」など、わが子への意識がその根底にあると考えられるものが多い。

このような保護者という立場からの共通意識を調査するだけでなく、さらに設問Q7（「あなたの現在の年齢について、あてはまるものに○をつけてください」）では、回答者の年齢を年代別に分けることを試みている。その結果は次のとおりである。

<調査対象>	三木市立M小学校の3学年と5学年の保護者	合計 100名		
①29歳以下	②30-39歳	③40-49歳	④50-59歳	⑤60歳以上
1名	54名	40名	3名	2名

しかし、「教師に必要な資質能力」について保護者の年齢によるちがいを分析するためには、調査対象の検討や設問内容の工夫がさらに必要になると思われる。それは、①回答いただいた保護者のほとんどが30代、40代であったこと ②設問が教師対象のものと同様であったこと ③回答結果は、保護者の年代や年齢によるちがいというよりも、わが子の学年によるちがいであったり、自らの子育て体験のちがいであったりしたものであると推察できること などから調査結果に問題が残ると考えられるからである。

今回の調査でも保護者の回答で30代と40代にはちがいが見られたが、年齢による普遍的なものというよりもわが子の学年によるちがい、たとえば、入学したばかりの1学年の保護者が期待する教師の資質能力と卒業期を迎えた6学年の保護者のそれとのちがいが当然予測される。また、2人以上の子どもがいる保護者の場合は、最初の子どものときの体験がもとになり、次の子どもの担任教師への期待や注文がより具体的になってくることなども考えられるのである。

このようなことから、今後行う本調査においては、保護者の年齢による「教師に期待する資質能力」のちがいを調査分析することの目的や意義、設問方法などについて、さらに検討するべきであろう。また、あらためてアンケートの項目と有意性を考え、年代別の分析と考察を工夫していく必然性や他を包含する項目や前提となるべき項目と結果としての項目などが並列されていないかどうかなどの見直しも必要であると思われる。

第4節 資質・能力を身につける場について

1. 小学校教師が考える「身につける場」

予備調査のQ2では、Q1に示した教師の資質能力を小学校教師はどこで身につけるべきかを教師、保護者それぞれに尋ねた。選択肢は10項目であり、1～9は「()で身につけるべきである。」という形式をとり、選択肢10は「必ずしも身につけなくてもよい」とした。複数回答が可能である。

この設問のねらいは、教師に必要な資質能力はどの段階で身につけるのが妥当であるのかをさぐることにある。集計によって、おおまかな傾向として、家庭および高校までの学校段階で身につけるべきだと考えられている資質能力、大学の学部で身につけるべきだと考えられている資質能力、そして教師になってから身につけるべきだと考えられている資質能力がとらえられる。特に教員養成カリキュラムの構築にあたっては、「大学の学部で、身につけるべきである」と回答があった資質能力に注目する必要がある。また現職研修の必要性はますます高まり、教師免許更新制度の導入が始まる。大学として現職研修のニーズにいかに対応していくかは大きな課題である。「教師になってから、身につけるべきである」と回答があった項目の傾向を知り、研修プログラムの開発に生かしていくことが求められる。

はじめに、教師の回答集計について考察する。教師が「家庭で身につけるべき」と考えた資質能力(図3)は上位から、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(35/55)」「だれとでも協力できる(32/55)」「考えたことを実行できる(31/55)」となっている。「高校卒業までに学校で身につけるべき(図4)と考えた資質能力は、「だれとでも協力できる(36/55)」「社会的な規範を守る(34/55)」「多様な考え方・見方を受け入れられる(33/55)」「自分自身が夢を抱いている(31/55)」の4項目が高い数値である。「だれとでも協力できる」は「家庭」と「高校まで」で共通、「考えたことを実行できる」は「高校までの学校で」においても上位5位、「自分自身が夢を抱いている」は家庭においても上位7位にある。これらはいずれも社会的な態度にかかわる項目で、小学校教師は家庭あるいは高校までの学校でまずは社会的な態度を身につけておくべきだと考えていることがわかる。ただし「社会的な規範を守る」は「高校までの学校で」は高い数値だが、「家庭で」は0回答である。少なくとも今日教師は規範意識は家庭でなく学校で身につけるべきだと考えられているわけだが、時代を遡っても同じ意識であったかどうかは教師養成の範疇を超えて興味深い問題である。「多様な考え方・見方を受け入れられる」も、高校までの学校では高い数値だが、家庭では0回答である。教師は家庭を「多様な考え方を受け入れられる」場としてとらえていないことがうかがわれる。

教師の回答集計の「大学の学部で身につけるべき」と考えた資質能力(図5)については、「教科内容についての知識が豊富(33/55)」「幅広い教養をもっている(32/55)」「得意分野をもっている(30/55)」の3項目が高い数値を示した。さらに「子どもの成長・発達に関する専門知識(26/55)」「国際社会で通用する語学力(25/55)」「自らの資質や能力を常に高めようとする(24/55)」が続いている。これらの項目は家庭や高校までの学校での上位項目とはうってかわり、教える内容・教える

対象についての知識に関連したものである。ただし高校までの学校でも「国際社会で通用する語学力」「自らの資質や能力を常に高めようとする」は最上位ではないものの上位3分の1にはいつている。「自らの資質や能力を常に高めようとする」は学びの態度特性に関する項目で、中等教育から高等教育において育成されると考えられていることがわかる。

教師の回答集計の「教師になってから身につけるべき」と考えた資質能力(図6)では、これまでの集計に比べて各項目の数値がかなり高いことがみてとれる。55人中40人以上が「教師になってから身につけるべき」と答えた項目が11項目もあり、「大学の学部で身につけるべき」資質能力で上位と考えた24人までを数えると全34項目中24項目にもなる。小学校教師にとって、「教師になってから身につけるべき」と考えられている項目がいかに多いかが推察される。最上位は「子どもの関心を引き出しながら授業できる(50/55)」,以下順に「進学指導上のアドバイスができる(49/55)」「子どもの評価が公正・的確(49/55)」「クラスを集団としてまとめていける(48/55)」「子どもの心のケア・教育相談ができる(48/55)」「授業技術が身につけている(47/55)」「保護者とのコミュニケーションがとれる(45/55)」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる(44/55)」「地域の実情について深く理解している(43/55)」「子ども一人一人の個性を大切にする(42/55)」「子どものしつけができる(42/55)」と続く。これらは学級経営や授業方法等に関わる項目が多い。この中に、「家庭で身につけるべき」、「高校卒業までに学校で身につけるべき」、「大学の学部で身につけるべき」資質能力の上位に位置付いた項目は一つもない。日常生活指導,子どもへの接し方,授業のやり方等は、現場に出て日々の実際の教育活動によって身につくという教師の実感が表れている。

図3 小学校教師の回答、家庭で身につけるべき資質能力(N=55)

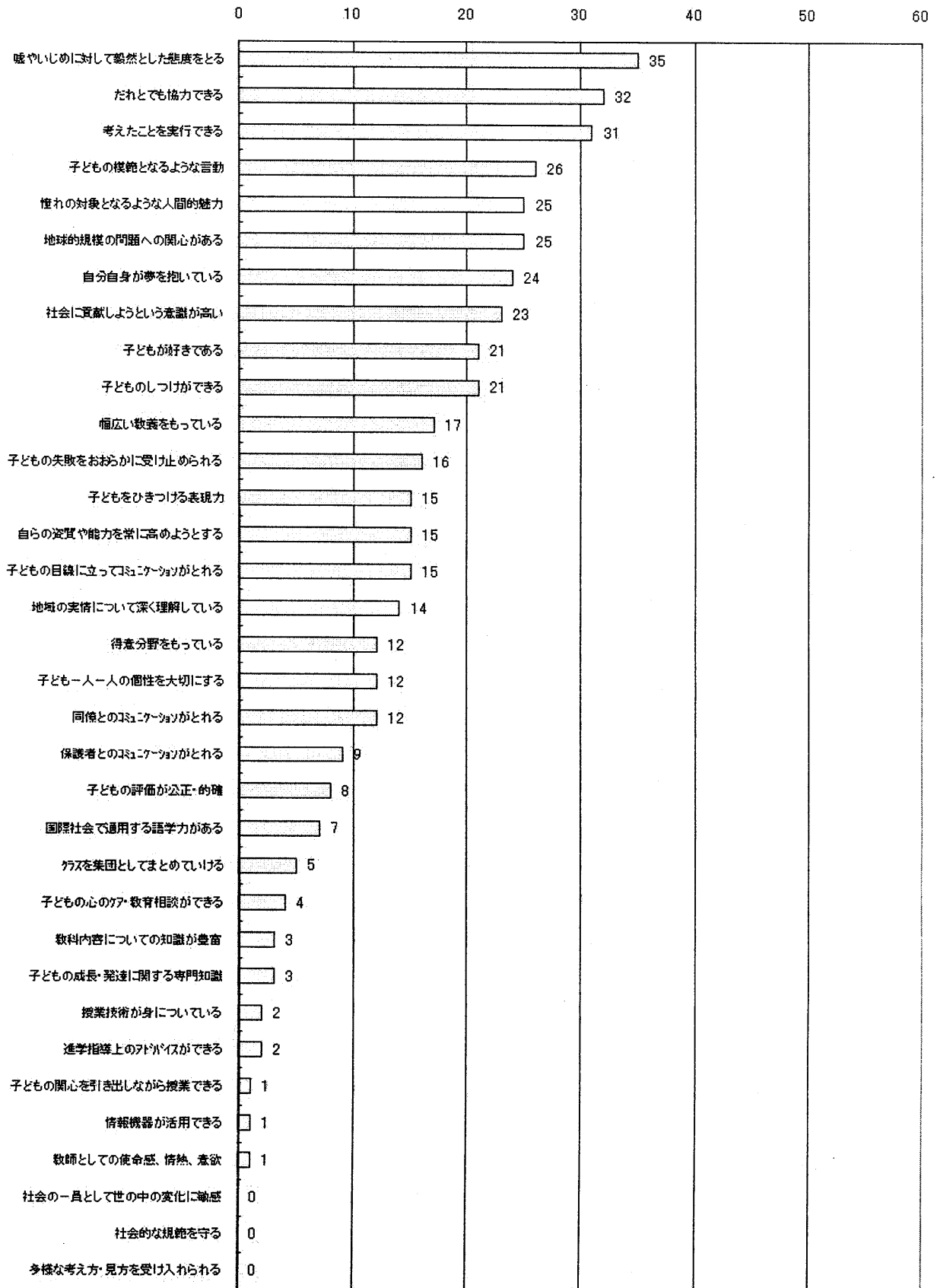


図4 小学校教師の回答、高校までに身につけるべき資質能力(N=55)

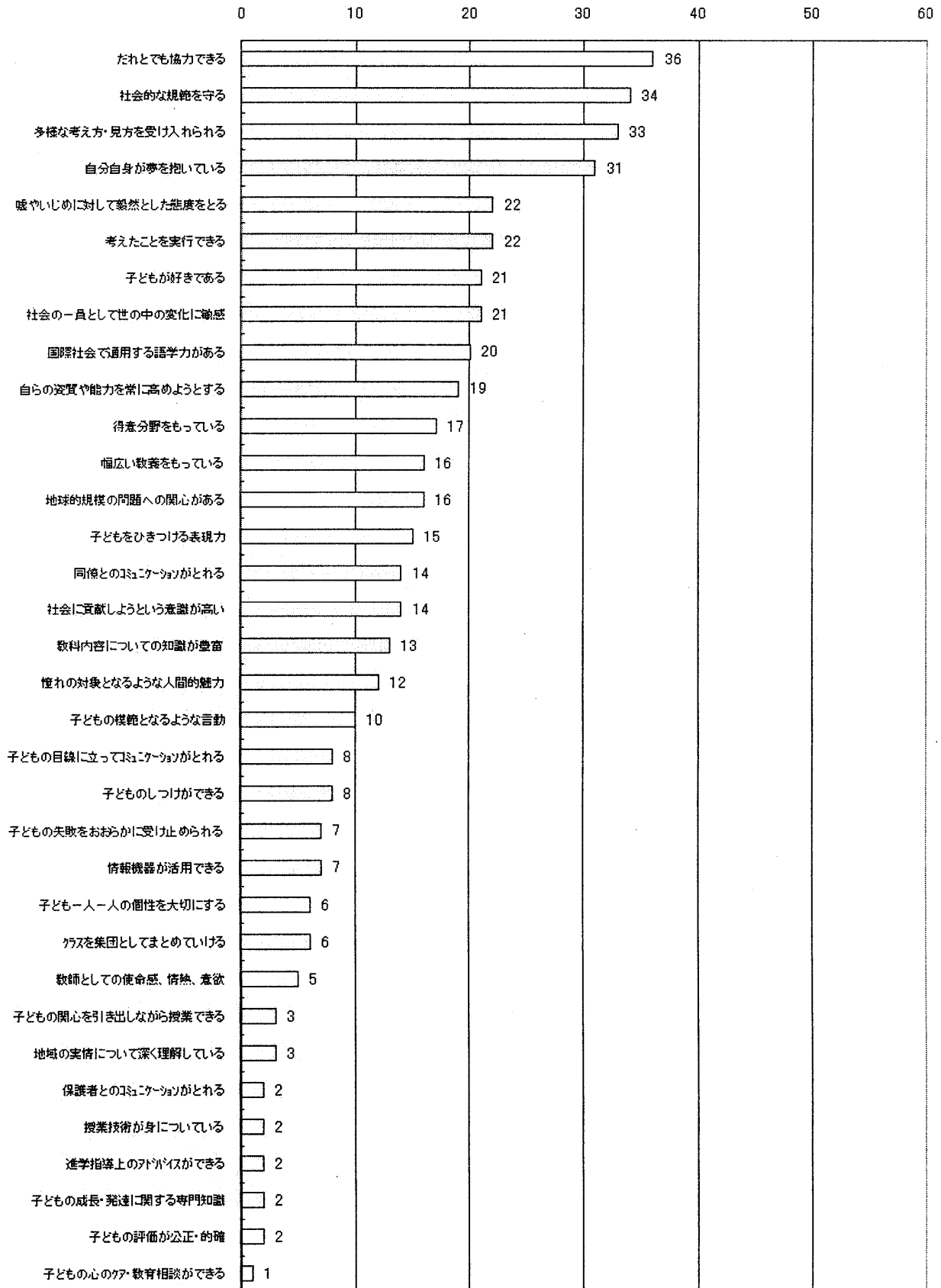


図5 小学校教師の回答、大学で身につけるべき資質能力(N=55)

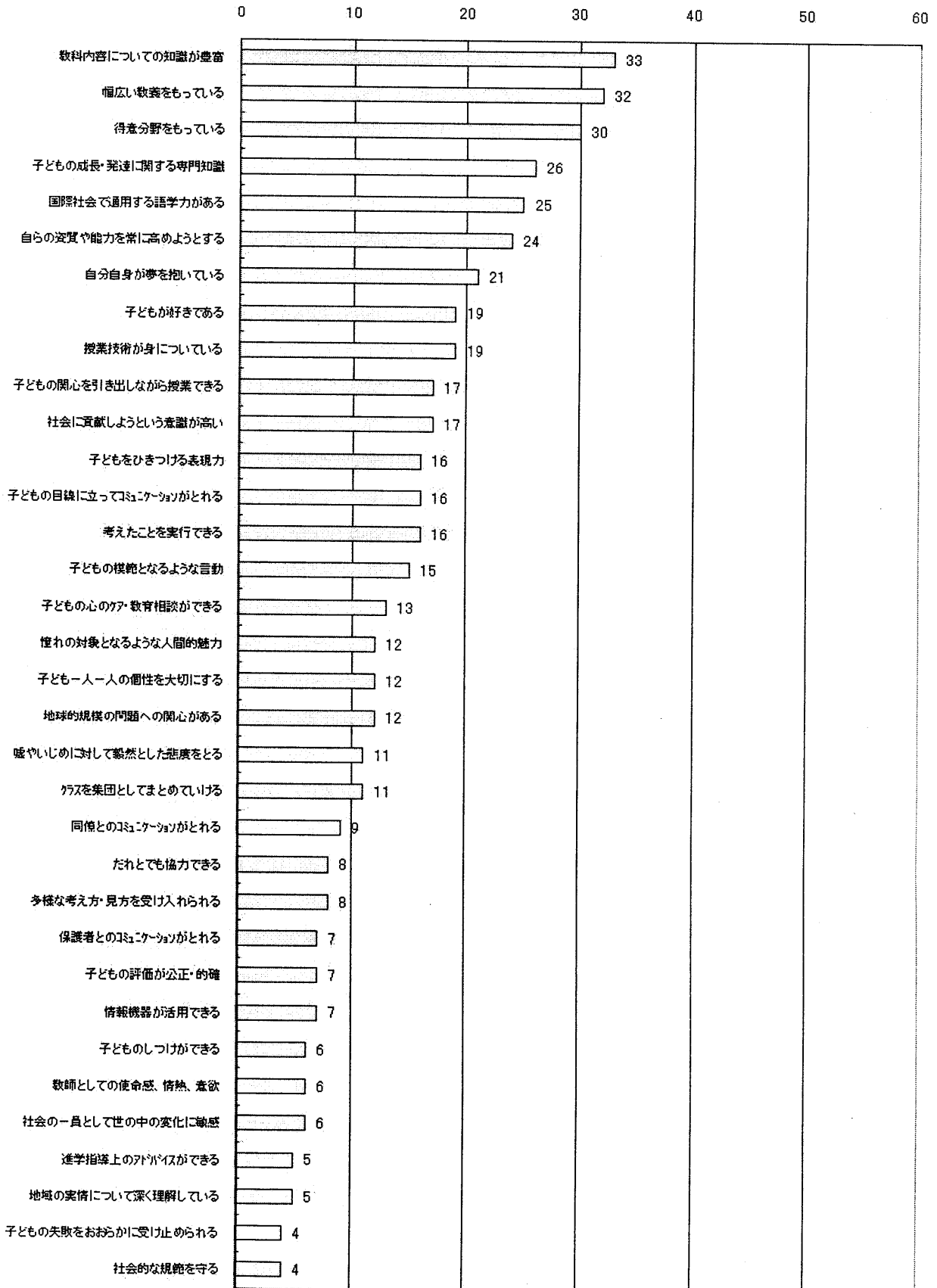


図6 小学校教師の回答、教師になってから身につけるべき資質能力 (N=55)

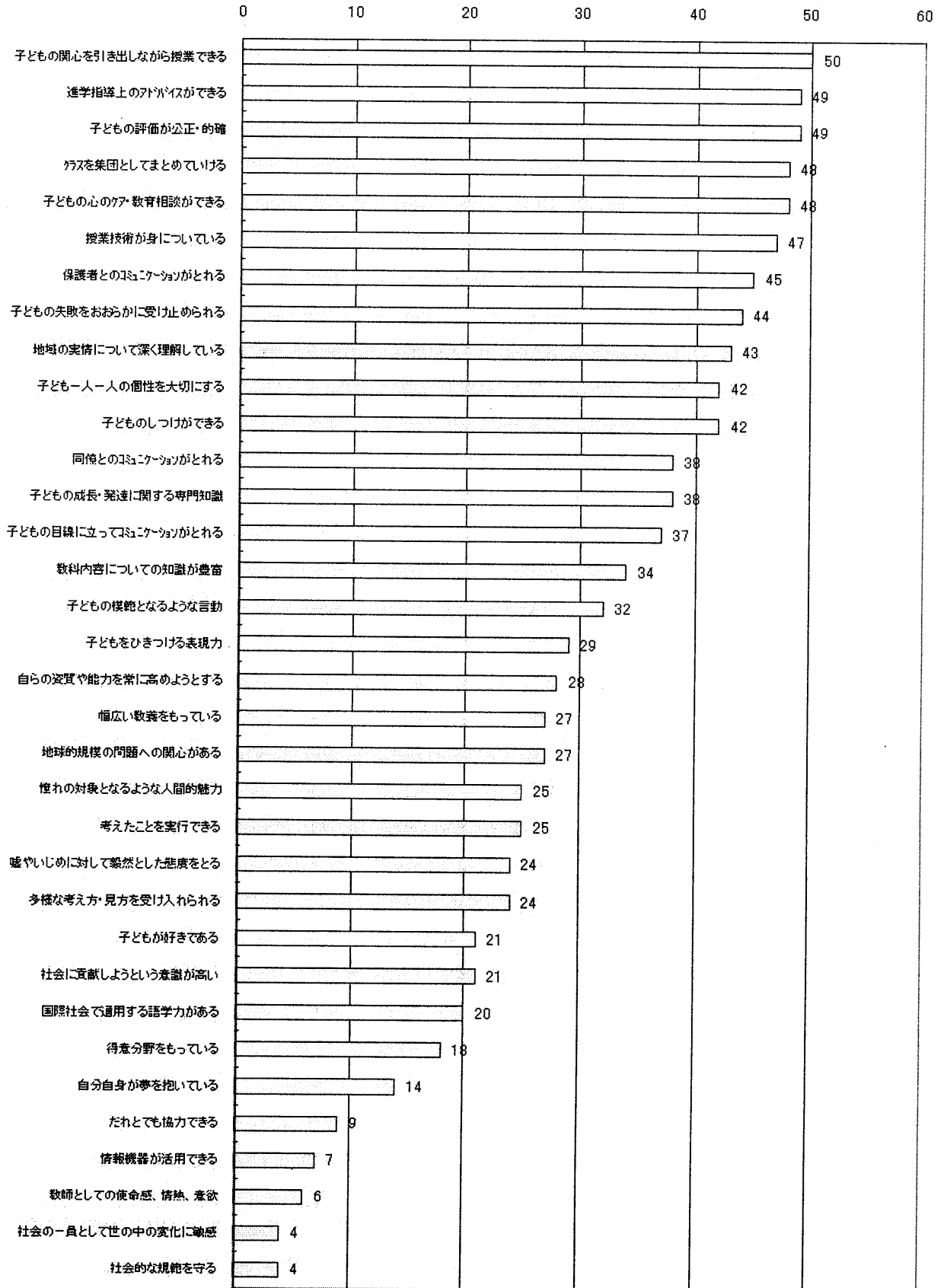


表1 「ぜひ必要」とされた項目 どこで身につけるべきか

番号	質問項目	教師側の回答で「ぜひ必要」が多かった上位7項目		その資質能力をどこで身につけるべきか(N=55)		部活動で		ボランティア		計		
		回答率	家庭で	高校まで	短大高専 大学院で	現職で	バイトで	ボランティア	不要			
6	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	48/55	35	22	7	11	5	24	3	3	0	113
19	クラスを集団としてまとめていける	47/55	5	6	3	11	3	48	5	1	3	85
16	子どもの関心を引き出しながら授業できる	43/55	1	3	5	17	5	50	1	1	2	85
3	自らの資質や能力を常に高めようとする	42/55	15	19	8	24	6	28	6	4	6	116
1	子どもをひきつける表現力	40/55	15	15	4	16	2	29	13	4	9	107
13	保護者とのコミュニケーションがとれる	40/55	9	2	2	7	2	45	1	6	9	83
18	子どものしつけができる	40/55	21	8	1	6	2	42	2	0	2	84

番号	質問項目	保護者の回答で「ぜひ必要」が多かった上位7項目		その資質能力をどこで身につけるべきか(N=100)		部活動で		ボランティア		計		
		回答率	家庭で	高校まで	短大高専 大学院で	現職で	バイトで	ボランティア	不要			
16	子どもに関心を引き出しながら授業できる	83/100	12	5	7	32	16	57	8	5	6	148
10	子ども一人一人の個性を大切にする	81/100	32	16	9	22	6	44	9	7	16	161
12	子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる	78/100	35	12	6	30	6	40	6	6	14	155
11	子どもが好きである	77/100	46	18	6	16	4	20	4	3	10	127
6	嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる	75/100	45	40	12	12	6	28	14	7	9	173
23	子どもの評価が公正・的確	74/100	23	9	7	20	5	62	8	2	7	143
1	子どもをひきつける表現力	72/100	27	17	13	27	5	32	19	6	16	162

「回答率」は「ぜひ必要」の回答実数/サンプル数

ここで、第1節でまとめた全体傾向とのかかわりから考察を加える。小学校教師が全体として「ぜひとも必要」とした上位に位置付いた「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」「クラスを集団としてまとめていける」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「自らの資質や能力を常に高めようとする」「子どものしつけができる」「保護者とのコミュニケーションがとれる」「子どもをひきつける表現力」について教師はどこで身につければよいと考えているだろうか。個別の項目の多重回答をまとめた数値によると(表1)、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」については、「家庭で身につけるべき」と答えている数が一番多く、「教師になってから身につけるべき」「高校までの学校で」と続いている。「クラスを集団としてまとめていける」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「子どものしつけができる」「保護者とのコミュニケーションがとれる」は先に述べたように、「教師になってから身につけるべき」として高い数値を示している項目である。個々に見ていくと、「クラスを集団としてまとめていける」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」の項目では第2番目に「大学の学部で身につけるべき」が多いが、「教師になってから身につけるべき」と答えた数との差は大きい。「子どものしつけができる」については第2番目に「家庭で身につけるべき」の数が多い。自ら受けたしつけが子どものしつけにある程度反映されると考えているのだろう。「自らの資質や能力を常に高めようとする」については、「教師になってから」「大学の学部で」の割合が拮抗し、「家庭で」「高校までに学校で」においても一定程度出現している。すなわちこの資質能力は生涯を通じて身につけるべきだと考えられていると言える。

2. 保護者が考える「身につける場」

次に保護者の回答集計の結果について述べる。保護者が「家庭で身につけるべき」と考えた資質能力(図7)は上位から、「子どもが好きである(46/100)」「だれとでも協力できる(45/100)」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる(45/100)」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる(42/100)」「子どものしつけができる(41/100)」である。「高校までの学校で身につけるべき」と考えた資質能力(図8)の上位は「だれとでも協力できる(59/100)」「社会的な規範を守る(48/100)」である。上位5位のなかで重なっている項目は、「だれとでも協力できる」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」の2項目で、社会的な態度にかかわる資質能力である。

保護者が「大学の学部で身につけるべき」と考えた項目では「教科内容についての知識が豊富(52/100)」「子どもの成長・発達に関する専門知識(48/100)」「幅広い教養をもっている(45/100)」が上位に位置する。(図9) 大学は知識を身につける場であるという認識が見られるが、保護者にとっては知識の中に子どもの成長・発達に関する専門知識が位置づけられているということであろう。

保護者が「教師になってから身につけるべき」と考えた項目では、最上位「進学指導上のアドバイスができる(70/100)」が大変高い数値である。(図10)「子どもの評価が公正・的確(62/100)」「子どものしつけができる(60/100)」「授業技術が身につけている(60/100)」「子どもの心のケア・教育相談ができる(58/100)」「子どもの関心を引き出しながら授業できる(57/100)」「クラスを集団と

してまとめていける (57/100)」「保護者とのコミュニケーションがとれる (56/100)」と続く。進学指導や評価の数値が高いことは、今日の教育課題を浮き彫りにしている。

保護者についても、第1節でまとめた全体傾向とのかかわりから考察を加える。保護者が「ぜひとも必要」ととらえた資質能力の上位は、「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「子ども一人一人の個性を大切にする」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」「子どもが好きである」「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」「子どもの評価が公正・的確」である。「子ども一人一人の個性を大切にする」「子どもの目線に立ってコミュニケーションがとれる」の項目は、教師より保護者が「ぜひとも必要」と考えている項目である。表1を見ると、これらの項目はどちらも「教師になってから身につけるべき」の割合が一番高く、続いて「家庭で身につけるべき」「大学の学部で身につけるべき」という順である。「子どもが好きである」については「家庭で身につけるべき」の割合が高い。「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」については「家庭で身につけるべき」と「高校までに学校で」の割合が同じくらいである。「子どもの評価が公正・的確」「子どもの関心を引き出しながら授業できる」は「教師になってから身につけるべき」の割合がかなり高い。

資質能力をどこで身につけるべきかについて、保護者の意識と教師の意識にはそれほどきわだった違いはないが、子どもに直接関わる項目の出現順位が保護者の方が高い。家庭で身につけるべき資質として保護者が上位に挙げた「子どもが好きである」「子どもの失敗をおおらかに受け止められる」を教師はやはり「家庭で」と挙げてはいるものの保護者より順位は下がる。後者については教師になってからの方が高い順位である。

以上本節で述べてきたことをまとめておく。小学校教師、保護者が「家庭」「高校までの学校」「大学の学部」「教師になってから」身につけるべき資質能力ととらえている項目には、それぞれ共通する属性が想定される。「家庭」「高校までの学校」では、「だれとでも協力できる」などの社会的な態度が重視される。「大学の学部」では「教科内容についての知識が豊富」など教える内容・教える対象についての知識に重点が移っている。そして「教師になってから」は教師、保護者とも非常に多くの項目を挙げ、学級経営や授業方法等に関わる項目が出てくる。保護者の進学指導や評価の数値の高さは今日の教育課題を示している。

教員養成カリキュラムの構築にあたっては、「大学の学部で、身につけるべきである」と回答があった資質能力に注目することになる。予備調査の結果、現時点では「教える内容・教える対象についての知識」とまとめられるが、「大学の学部」以外で身につけるべきだと回答された項目について、養成段階では全く視野に入れなくてよいのかを検討する余地がある。また、あらためて教師になってから身につけるべきだと考えられている項目の多さが浮き彫りになった。学部段階の養成と教師になってからの教師教育の連携も視野に入れなければならないだろう。予備調査をふまえた本調査での課題になろう。

図7 保護者の回答、家庭で身につけるべき資質能力(N=100)

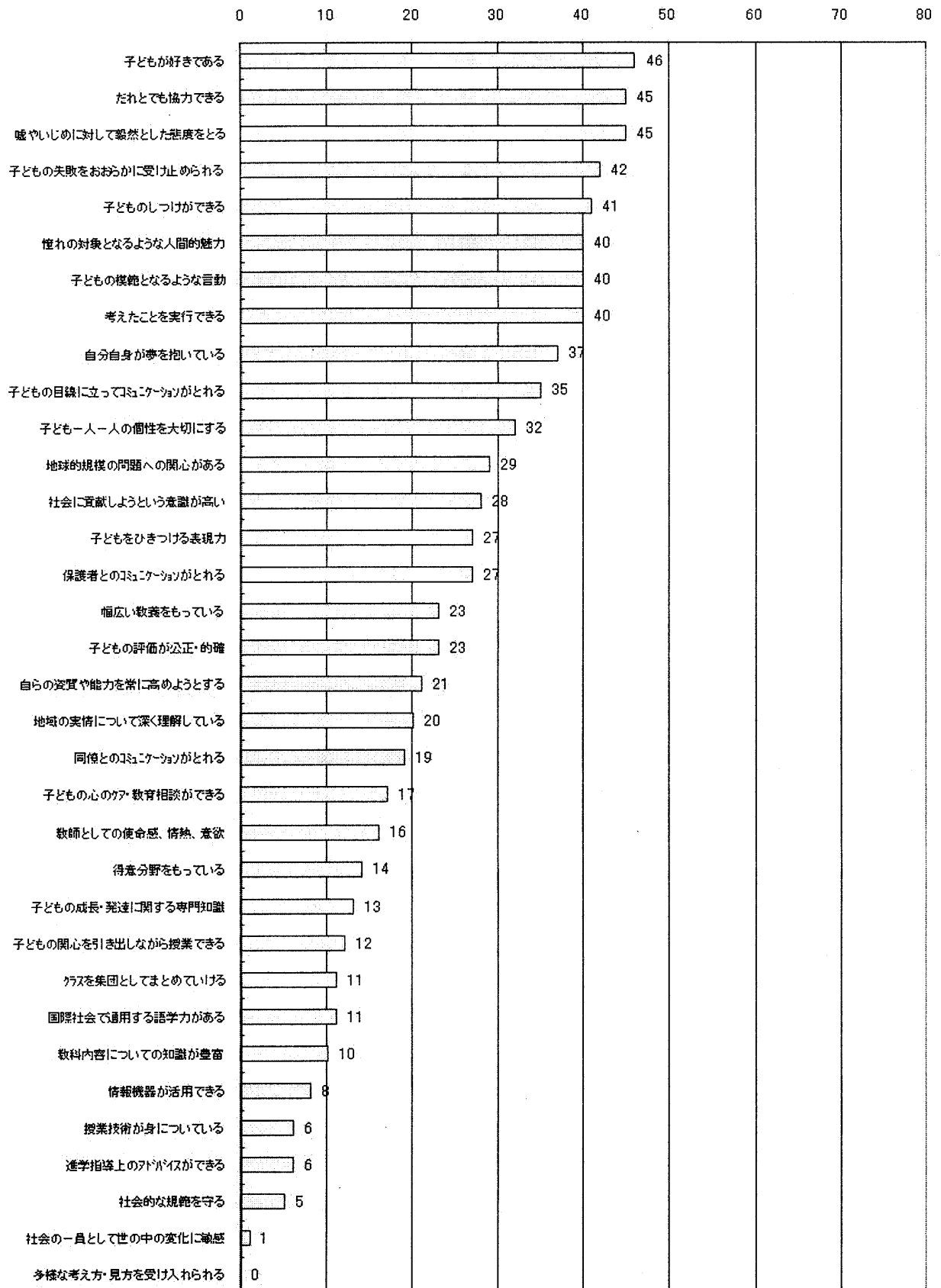


図8 保護者の回答、高校までに身につけるべき資質・能力(N=100)

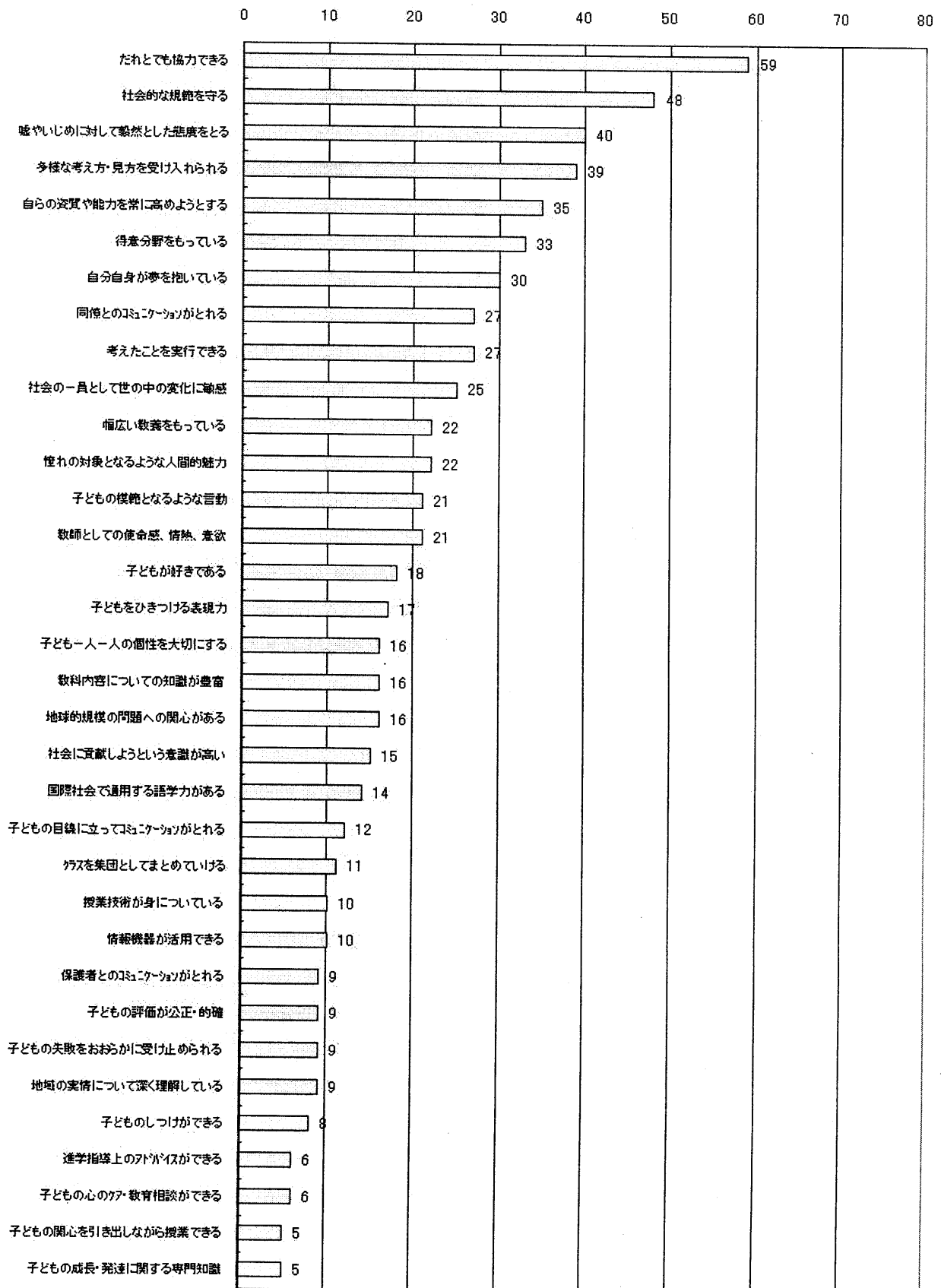


図9 保護者の回答、大学で身につけるべき資質能力(N=100)

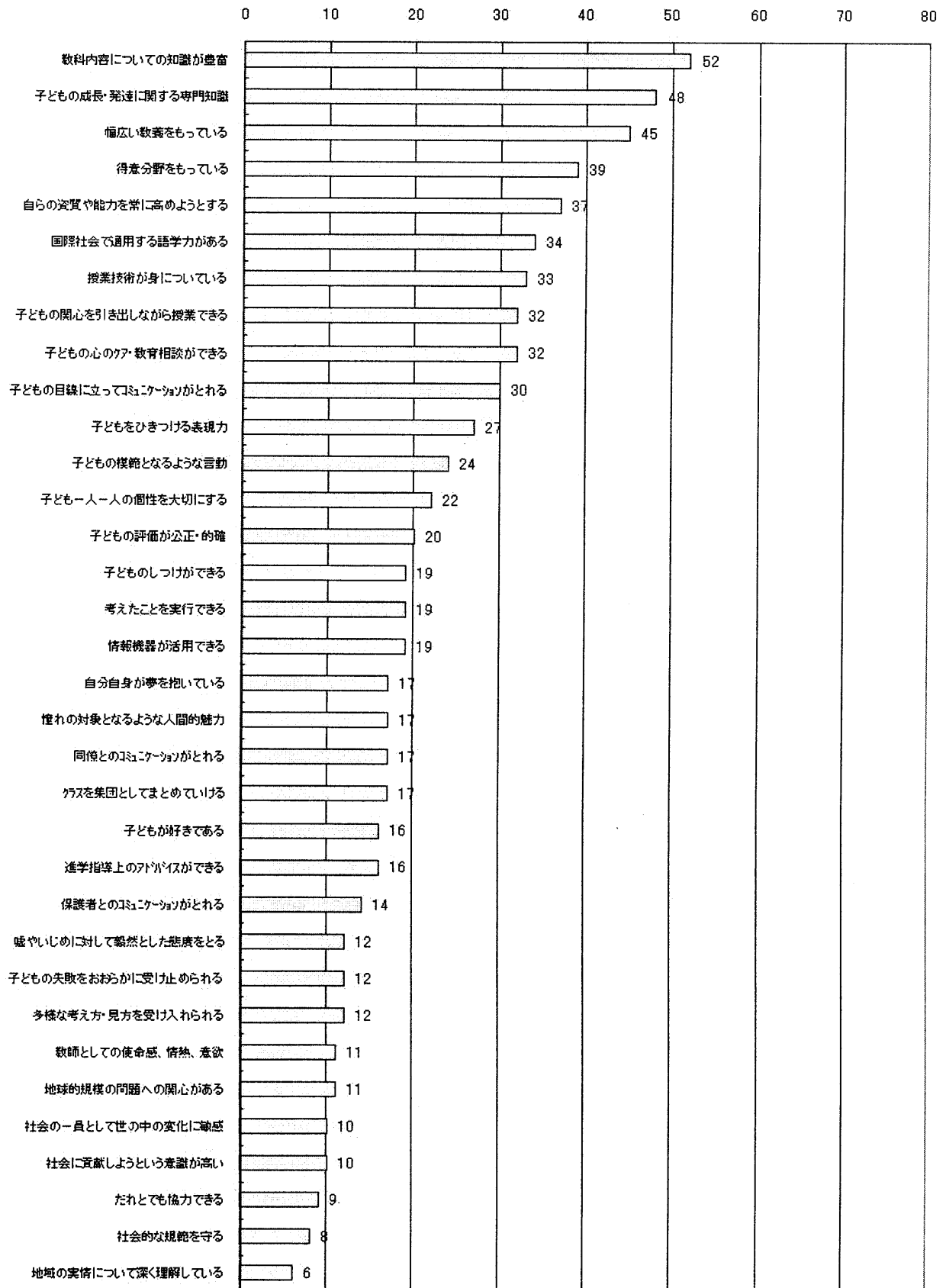
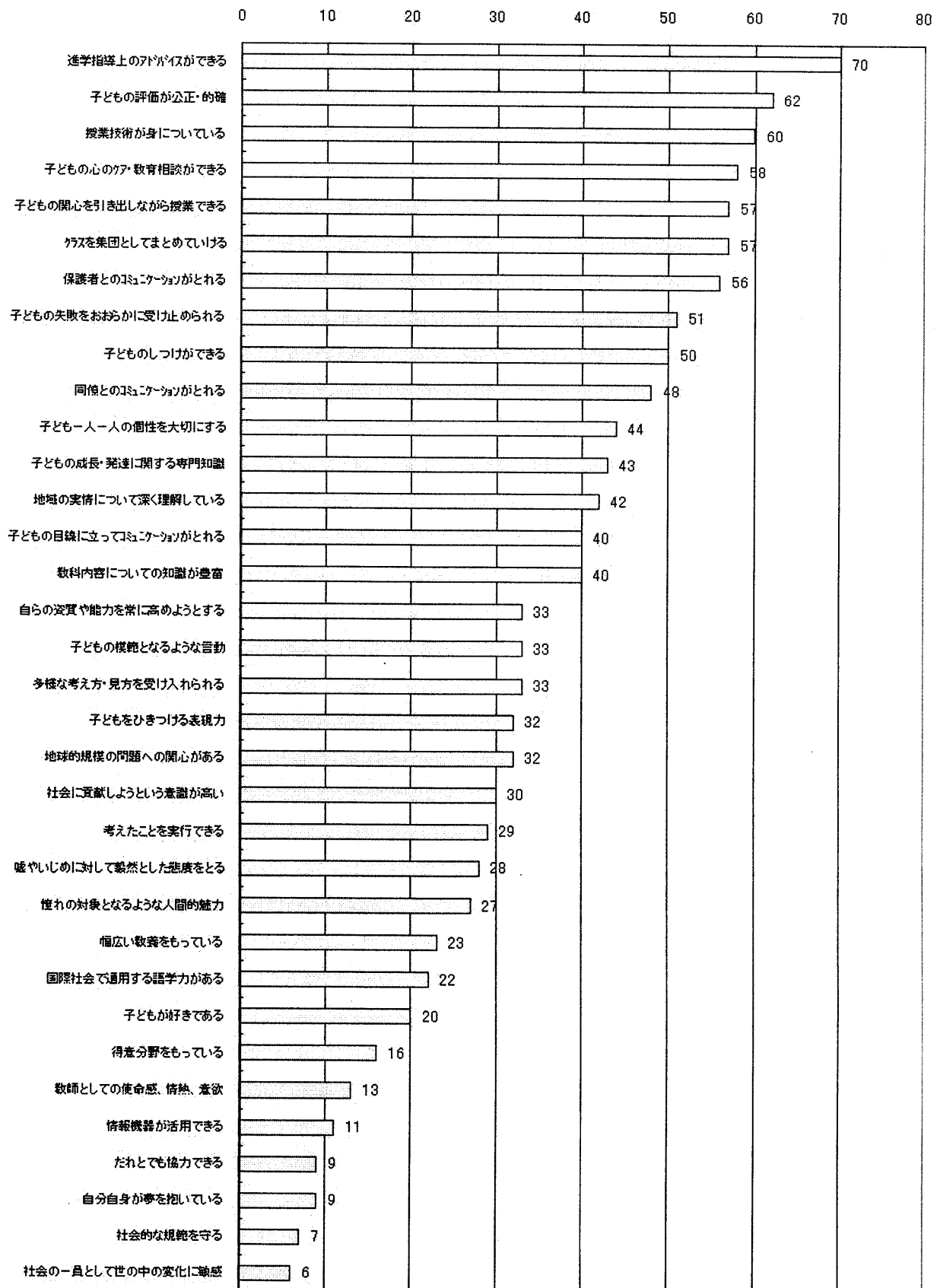


図10 保護者の回答、教師になってから身につけるべき資質能力(N=100)



まとめ

小学校予備調査の結果明らかになったことをまとめる。教師の資質能力として、小学校教師・保護者ともに高い割合で必要と考えられているのは、実践的な専門性のうち、「子どもの関心を引き出しながら授業できる」「クラスを集団としてまとめていける」「子どもをひきつける表現力」等の子どもとの関わりに関することであった。実践的な専門性のなかでも、情報機器や語学力等文部科学省がこれから必要な能力としている能力は総じて数値が低い。子どもが学校で安心して過ごせるかどうかへの関心が高く、それに相反するような状態への危機意識が強いことを反映して、グローバル化への対応よりは目の前の一人一人をしっかりと教育する教師が求められているといえよう。

豊かな人間性に関わる項目は、「嘘やいじめに対して毅然とした態度をとる」「子どもが好きである」「子ども一人一人の個性を大切にする」などが教師保護者共に高い割合であった。やはり反社会的な行動から子どもを守るという意識を見て取ることができる。「社会に貢献しようという意識が高い」の数値が高くないのは、教師はまずは学校で子どもと向き合っほしいとの願いの裏返しであろう。開かれた社会性に関しても「地域の実情について深く理解している」「地球的規模の問題への関心がある」は数値が低く、新たな時代に求められる能力が後回しになるという点で同じような傾向である。

教師と保護者の意識は、目の前の子どもをよりよく教育するという点で共通しているが、集団を相手に教育する行為の意味を問おうとする教師と自分の子どもの側から教育を見る保護者との考え方のちがいが鮮明に出ている。

教師に必要なとされる資質能力を年齢別に見ていくと、教師が教育実践を通して獲得してきた実践知をもとに回答を寄せていることが推察される。学校という組織のなかで、役割に応じて重視する力が違うことが見てとれる。さらに、教師が必要とされる資質能力をどこで身につけるかについての回答を参考にすると、高校までの学校段階と大学の学部、教師になってからではそれぞれ身につけるべきだと考えられている力の属性が異なる。これらの予備調査分析を精緻なものにしていくには、「どの段階で」「何を」身につければよいのかという教員養成まで含めた「教師のライフステップ」を検討する必要がある。

本調査に向けての課題はたくさんあると考えられるが、以上の分析をふまえてそのうちのいくつかを挙げておきたい。

- ・予備調査分析でつかめなかった事項の整理（教師の年齢と経験年数の相関、保護者のフェイス項目の検討等）
- ・調査項目の検討
- ・教師・保護者の立場を考慮した質問紙の工夫（保護者への質問の仕方等）
- ・必要と考える、あるいは必要と考えない理由をステークホルダー自身に語ってもらう工夫

予備調査設計段階では、質問紙調査に加えて、観察とインタビューを予定していたが実施することができなかった。本調査では、ステークホルダーの意識を探るという意味でこれらも重視したい。

Abstract

The purpose of this research is to investigate necessary abilities to be a good elementary school teacher and to develop programs for teacher training and an incumbent education. For this purpose we sent out questionnaires to the people who take part the academic training. We call them 'stake-holder'. In this thesis, the result of this preliminary research was analyzed. Every 'stake-holder' made answers sensitively reacting to today's child's problems. However the focus point in the process of watching children is different between the guardian and the teacher. It is thought that teachers acquire certain kind of skills at the university, and acquire other skills in work school. It is hoped this research leads to further research that ascertains the life step of teachers.